

甲賀市の文化財⑦

甲賀の神道文化①

甲賀の神像

日本の神は、古来、神祇信仰に基づき、自然神崇拜を中心とした自然の摂理の中に神々の存在を認めていました。ところが、神仏習合や本地垂迹思想の発生とともに仏教の影響を強く受けて、神の姿を木彫りで表現する「神像」がつくられるようになり、神を偶像化する事によって信仰や祭祀の対象としたのです。



○矢川神社神像（甲賀市指定文化財）

甲賀市には、主に八坂神社（水口町）、水口神社（水口町）、矢川神社（甲南町）、新宮神社（甲南町）、大鳥神社（甲賀町）に神像彫刻が伝えられています。それぞれの神社には千光寺や矢川寺、新宮寺、河合寺などの寺院が寄り添っていました。例えば、新宮神社の社殿再建にあたっては新宮寺別当が願主となり、神仏に願いを立て、再建の主導的立場

になっているなど、神社とお寺が密接な関係にあったことを示しています。甲賀市内で古い神像様式を伝える矢川神社には、三体の木造神像が市文化財に指定されています。

男神像は、檜材一本造で、壮年像を思わせる容姿で、巾子冠をかぶり、衣冠束帯姿で、袖の中に両手を隠し、目を大きく見開いて口を閉じ、寂然と座つて凛々しい威容を感じさせています。

像表面には、簡素な彩色が施され、顔には白土地彩色、冠・肩・瞳・もみあげを黒彩し、着衣は朱彩を施しています。11世紀頃の造像と考えられています。

また女神像は、気品あふれる表情で、髪は中央で左右に分けて肩に流しています。両手は胸の前で重ねて袖の中に隠しています。着衣部の正面と背面には墨書があり、像の形式などから12世紀後半頃の造像と考えられています。

この他、神仏習合を示す資料に懸仏があります。懸仏は神の依代である鏡面に別鑄の半肉彫りの仏像や神像を取り付けたもので、柱や壁にかけて信仰の対象としました。飯道神社（信楽町）からは昭和55年の解体修理の際に、本殿床下から約1,000個の懸仏が発見されています。

また、新宮神社には、鎌倉時代に遡る古い神像が残されており、類似した神像が数体彫刻されていることが確認されています。

天台仏教の広がりや荘園経営と深く結びつき、互いに寄り添いあいながら、神社の造営が行われ、その時、ご神像もつくられていったものと考えられます。

【問い合わせ】
文化財保護課
FAX 86-83880
86-8026

市史の小徑

第3回

天保義民碑の「謎」

草津線三雲駅のほど近く、湖南市三雲にある伝芳山の中腹に「天保義民之碑」と大書された巨大な碑が建っています。江戸時代甲賀郡で最大の事件となった天保一揆にかんする歴史的なモニュメントです。

一揆は天保13年(1842)旧暦10月14日、江戸幕府による新開可能地見分のための検地が強引に進められたことに反発した農民によって起こされました。三上村にあった幕府役人の宿舎に強訴し、検地の「日延べ十萬日」を勝ちとったものの、その後の厳しい追及のなかで指導者の多くが犠牲になりました。

明治維新後彼らは復権し、犠牲者は義民として顕彰が進められますが、顕彰運動の記念碑ともなったのが明治31年5月に松田郡長を中心に建立された現在の義民碑です。人造石製で高さは約10m。その大きさに驚くとともに、農民たちが目指した三上山を遠望する絶好の位置にあることが実感できます。

ところで今回の合併により旧甲賀郡行政事務組合から甲賀市に移管された歴史資料のなかに、4mにおよぶ和紙をつないだのものがありません。開いてみると「天」の字をデザイン

した碑の輪郭のなかに「天保義民之碑」「明治三十年歳在丁酉十月建」と墨書され、現在の碑面文字と同様水口出身の書家、巖谷一六の揮毫です。

しかし書かれた建立時期や碑の大きさ、文字の雰囲気は現在のものとは違います。建立計画が変更され、使われずに残ったのか、それとも寄付を得るため見本だったのか、有名なものだけに気になる「謎」といえます。

なお毎年10月15日には、この碑前に一揆関係者が集まり、義民をしのぶ祭典が催されています。



○もとはこの大きさ？ それとも「見本」？

【問い合わせ】総務課市史編纂係
86-8075 FAX 86-8380